法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

日本の絵本を非日本語で読む2016 : 法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み

横山, 泰子 / YOKOYAMA, Yasuko

(出版者 / Publisher)
法政大学小金井論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
83
(終了ページ / End Page)
95
(発行年 / Year)
2017-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00014000

日本の絵本を非日本語で読む2016

―― 法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み ――

横　山　泰　子

I

法政大学大学院国際日本学インスティテュートで「伝統文化と民衆世界I」という科目を担当している私は、毎年絵本を題材とした授業を行っている。2011年から日本の絵本の外国語訳を受講生と読んで考察する授業を行い、その様子をまとめてきた(1)。本稿では、2016年度の授業を行いながら考えた点をもとに、過去の事例を振り返りつつ、今後の展望を述べてみたい。

筆者はもともと絵本研究者ではないが、絵本を使った授業は外国人留学生の増加という現実に対応するために始めた。日本語や日本文化に興味を持って参加している留学生の多くはまだ日本に来て日が浅く、彼らの日本語や日本文化に関する知識は日本人学生に劣る場合がある。が、だからこそ留学生の質問や指摘は、日本文化の中に埋没している日本人に多くの刺激を与えてくれる。せっかく日本人と外国人がともに学ぶ場に集っているのだから、お互いが率直な対話を行い、質問したり答えたりできるような雰囲気を作る必要があると思い、絵本を活用している。絵本は内容が平易であると同時に文化の違いを明確にあらわしており、異文化理解の道具として利用しやすいからである。

近年日本の子どもむけの絵本は諸外国語に翻訳され、海外で広く読まれているが、その事実は当の日本人にはあまり知られていない。外国人留学生は日本のマンガについてはおおむねよく知っているが、絵本に関する知識はあまりない。また、私のクラスには保育や幼児教育を専門とするような大学院生は基本的には来ないので、参加者たちは出身国を問わず「外国語に翻訳された日本の絵本」には詳しくないのである。誰にもあまり知られていない資料を前に、外国人留学生は自分の慣れ親しんだ言語、そして日本人学生は日本語という武器を用いてともに

考えるのがねらいである。

今年度の受講生は総勢７名（日本人学生１　留学生６）で、全員の共通言語は日本語であったため、授業は日本語で行った。留学生には外国語に翻訳された絵本を渡し、テキストを日本語に訳し直すという課題を出した。中国人留学生の場合、日本の絵本の中国語訳を読み、自分なりに訳した和文を授業中に音読し、翻訳の際に難しかった点や気づいた点を報告する。日本人学生には日本の絵本の英語版を渡し、英文和訳を課す。彼らも同様の報告をする。その後で、私が日本語のオリジナル版を読む。そして、学生の日本語訳と日本語原文がどう違うかを検討し、皆で話し合っている。今年教材とした作品は、以下のとおりである。

1　松野正子作　瀬川康男絵『ふしぎなたけのこ』英語版
2　長谷川摂子作　ふりやなな画『めっきらもっきらどおんどん』中国語版
3　たかどのほうこ『まあちゃんのながいかみ』中国語版（簡体字）
4　宮西達也『おまえうまそうだな』中国語版（簡体字）
5　小風さち文　山口マオ絵『わにわにのおふろ』中国語版（繁体字）
6　林明子『こんとあき』中国語版（簡体字）
7　いまいあやの『くつやのねこ』ロシア語版

例年授業開始の際、参加者には得意な言語が何かを自己申告するよう言っている。それに応じて、クラスのスケジュールを組んでいる。参加者の言語能力にあわせて教材を選定しているために、授業開始前に準備ができないのが常である。過去に多くの中国人学生が参加したため私が購入した中国語の絵本はかなりの分量になり、留学生が中国語圏で絵本をおみやげに買ってきてくれることもあった。よって、授業開始当初から比べると、中国語の絵本を準備するのはかなり容易になった。教材の確保は、毎年授業開始時の大きな課題である。しかし、参加者の出身地や出身国が多様であれば色々な意見が出されるのが常であり、授業そのものも面白くなる傾向が見られる。

Ⅱ

近年扱った絵本のうち、特筆すべきと思われるのは宮西達也の『おまえうまそ

うだな』である。この作品は2003年に刊行された恐竜の絵本で、シリーズ化されて現在14作を数える。日本以外の国では中国、台湾、韓国、フランスで翻訳版がある。2010年にはアニメ映画化されており、日本国内外で高い評価を受けた。特に韓国では2011年にアニメ『あなたをずっとあいしてる』が公開されたが、輸入した韓国映画会社メディアキャッスルは同作の可能性を高く評価し、第二弾の版権を獲得した。韓国側の100パーセント出資により第二作『あなたをずっとあいしてる』が製作され、2015年に公開されたという経緯がある。留学生たちは絵本そのものを読んだことはなくても、アニメが有名だったため宮西達也の恐竜の絵を知っていることが多い。『おまえうまそうだな』は日本のみならず韓国でも中国でも劇化されており、幅広い層の人々に享受されているものと思われる。物語の主人公が恐竜であって特定の国の人間を描いているわけではないところが、国の壁をこえやすかったのかもしれない。

『おまえうまそうだな』のあらすじを記す。大昔、卵から生まれたアンキロサウルス（草食恐竜）の赤ちゃんの前に、ティラノサウルス（肉食恐竜）が「おまえうまそうだな」と言って近づく。赤ちゃんはこわがるどころかティラノサウルスを父親だと思う。赤ちゃんは自分の名前を「ウマソウ」だと思い、名前を知っているティラノサウルスを親だと勘違いしたのだった。ティラノサウルスはとまどいながらも、赤ちゃんの父親のようにふるまう。二頭の間に親子の絆が生まれるが、ティラノサウルスは無理矢理ウマソウと別れ、ウマソウはアンキロサウルスのもとに帰る。

この絵本は、中国では『你看起来好像很好吃』の題で2009年に二十一世紀出版社から翻訳が出された。日本語版が縦書き右綴じであるのに対し、中国語版は横書き左綴じであるが、オリジナルの絵を左右反転させることで文字と絵の流れを一致させている。日本語版は、擬音語・擬態語（オノマトペ）がよく使われている。オノマトペが多いのは日本語の特徴であるが、中国語にはオノマトペはあまりない。それゆえ、日本語から中国語への翻訳の際、オリジナル版のオノマトペをどう処理するかは難しいのであるが、この翻訳書はかなり忠実にオノマトペを翻訳している。

私の授業は絵本という児童向けの本を教材としているので、大学院生がふだん扱っている研究論文の文章と比べ、難易度が低く見える。しかし、日本語能力の高い外国人学生であっても、児童書に頻出する擬音語・擬態語には常に苦労して

いる。『你看起来好像很好吃』では、卵からかえったアンキロサウルスの赤ちゃんが歩いている様子（図1）は「甲龙宝宝觉得好孤单，抽抽塔塔地哭来，一边哭一边走・・・」と表現している。対する日本語原文は「あかちゃんは　さみしくて　しくしく　なきました。そして、なきながらとぼとぼ　あるいていると」となっている。

図1　『你看起来好像很好吃』二十一世紀出版社、2009年より

日本人にとってこの場の「しくしく」は、よく使う言葉でもあり、特に難しいとも思わない。しかし、まぎらわしいのは「しくしく」に似た「めそめそ」などの表現である。どちらも日常的によく使われる言葉であるが、どう違うかを説明するのは容易ではない。さらに、「しくしく」「めそめそ」以外で、泣く様子を表す擬音語・擬態語を考えて挙げ、それらとの違いもまた考えてみた。ある程度皆で話し合った後、有効と思われる参考文献（山口仲美編『擬音語・擬態語辞典』講談社学術文庫、2015年）を紹介して、今後日本語の擬音語・擬態語で疑問が生じた時には参照するように指導した。

『おまえうまそうだな』のアンキロサウルスの赤ちゃんは、なぜ「めそめそ」ではなく「しくしく泣く」のか。それは、主体が「めそめそ泣く」のと「しくしく泣く」のでは相手に異なる印象を与えるからである。前掲の『擬音語・擬態語辞典』では、「めそめそ」の説明として

> ほとんど声をださず静かに涙を流す様子。悲しかったり途方に暮れたりして、いつまでも泣いている場合に用いる。めめしさや意気地なさなど、脆弱な印象を伴う。「何かの拍子に落ち込むと、めそめそしてしまいます」（Hanako01・8・15合併号）

と書いてあり、さらにこの語の歴史的な変容が説明される。そして

類義語「しくしく」
静かに涙を流す点では「めそめそ」と同じだが、「しくしく」は鼻をすすったりか細い声を出したりして、音を伴う泣き方を表す。めめしさはあまりなく、「めそめそするな」としかることはあるが、「しくしくするな」としかることはない。

と補足されている。ウマソウの様子を「さみしくて　めそめそ　なきました」とすると、語り手がウマソウを「意気地なし」としてしかっているようであり、主人公に対して否定的評価を下したことになってしまう。この作品でのウマソウは生まれたばかりの無力な存在であるが、その半面無邪気でかわいらしく、無力さを武器とする魅力にあふれている。そこで、「めそめそ」よりは「しくしく泣く」方がウマソウにはふさわしいのである。

さて、「しくしく」と「めそめそ」の違いが理解できれば、とりあえず絵本の翻訳問題は解決されるのであるが、留学生には「しくしく」の意味をさらに深く伝えておきたい。前掲書の編者山口仲美は「はしがき」において「実は、日本語の擬音語・擬態語に大いに悩まされている人々がいます。日本語を学ぶ外国人と日本語を他の言語に翻訳する人たちです。日本語の相当うまい外国人でも、擬音語・擬態語は苦手です。日本語の達者な留学生が腹痛で医者に行ったら、『しくしく痛むの？きりきり痛むの？』と聞かれてとても困ったと訴えます。『しくしく』と『きりきり』の意味の違いが全く分からなかったそうです」と述べる。私も過去に留学生にこれらの意味の違いについて尋ねてみたことがあるが、やはり難問のようであった。一方「しくしく」「きりきり」の違いについて、日本人は経験的にわかるので、授業ではあえて日本人受講者には日本語による的確な説明を求める。留学生には授業を手がかりに語彙を増やしてほしいし、日本人学生には外国人が難しいと感じる点が何かを知り、説明能力を磨く場にしてほしいと思う。

前述したように『おまえうまそうだな』はアニメ映画版が韓国や中国で人気を博したが、日本では絵本が売れてからしばらくして映画化された。作者の宮西達也は映画化についてのインタビューで「『ティラノサウルス』シリーズの映画化にあたって、映画のスタッフの方たちに最初にお願いしたのは、絵本とは違うものをつくってほしいということでした。絵本は動かないし、音も出ないでしょう。お母さんやお父さんが１ページ１ページめくって、一字一句読んでいく中で、子

どもたちが想像するんですよね。絵本に描かれていないティラノの動きや表情を思い浮かべて、つくりあげていくんです。それに対して、映画は総合芸術ですから、キャラクターたちが動いて、言葉を話して、音楽や効果音までつく。表現方法にかなりの違いがあるんです」「この映画を観る方たちには、絵本のことをわすれて楽しんでほしいですね」と述べている[(2)]。筆者は映画版『おまえうまそうだな』も観たが、たしかに映画でも絵本でも、宮西のシリーズには家族愛や友愛など、様々なかたちの愛が描かれている点で共通点がある。映画版は絵本数冊の内容をもとにストーリーを作っているため話が複雑であるうえ、音楽や動画を楽しめる。映画に比して、絵本の表現は単純である。

中国には古くから絵とともに語られるはなしの伝統があり、20世紀には連環画というマンガ的な文芸が子どもの心を引きつけてきた[(3)] のだが、「人民網日本語版」によると、教育の一環として絵本の読み聞かせが浸透している日本とは異なり、中国で絵本という概念が定着しはじめたのはここ最近のことだという[(4)]。大都市の外国文化に触れる機会が多い人を除き、絵本を見たことも聞いたこともない人が圧倒的だが、近年、中国政府が絵本に力を入れ始め、絵本作家育成プロジェクトと称するセミナーなどが開かれ始めたらしい。また、中国の子どもたちの興味はマンガ・アニメに向いており、勉強や習い事に忙しいために読書をする時間がないことも指摘されている。

そんな中、宮西達也は定期的に中国を訪れ、2013年に北京に招かれ絵本講座を開催した。プロのイラストレーターや絵本作家らの他、教員、主婦、学生ら40人を超える参加者の前で、宮西は中国語による絵本の読み聞かせや絵本作りのコツなどについて講演した。中国では欧州の絵本に比べて日本の絵本が同じアジア人として近い文化を共有するせいか人気が高いらしい。とくに宮西達也の絵本は家族関係や絆を描いたものが多く、受け入れやすいようだ。宮西は前掲インタビュー記事で「絵本と映画で表現方法は違いますが、作品に込めたメッセージはまったく同じです。僕がこの『ティラノサウルス』シリーズを通して描いているのは『愛』」と語る。単純なメッセージ「愛」を描いているからこそ、多くの人々に享受されているのであろう。

宮西には『おとうさんはウルトラマン』という人気シリーズもある（図2）。日本のテレビ番組「ウルトラマン」をもとにした絵本で、まじめで不器用なウルトラマンが子育てをするという設定であるが、子どはもちろん父親世代に人気

がある[5]。中国でのウルトラマンは1993年に正式にテレビ放映されてから人気は現在にいたるまで続き、親子二代でウルトラ作品を楽しむという現象も起きているという[6]。『おとうさんはウルトラマン』シリーズは、ウルトラマンと無縁なひとには面白みが伝わりにくい可能性があるが、ウルトラ作品のファンならば絵本の世界をより深く楽しめる。ウルトラマンが愛されている中国で翻訳すれば、かなりの人気を集めるのではなかろうか。

図２　みやにしたつや
『おとうさんはウルトラマン』
学研、1996年より

Ⅲ

日本の絵本には、しばしば生活描写の上で入浴の場面が描かれる。自宅や銭湯での入浴行為そのものを扱った作品も多い。お風呂嫌いの子どものため、入浴の意義を理解させ楽しませる知育絵本も作られている。こうした「おふろ絵本」の存在は、現代において日本人の多くが風呂（かなり熱い湯）にほとんど毎日入っているという事情を反映していると思われるが、異文化コミュニケーションの教材としても興味深い。今年度の授業では中国語の『わにわにのおふろ』（図3）を使ったが、『こんとあき』でも登場人物が入浴するシーンで物語がしめくくられている。

図３　『鱷魚愛洗澡』
小魯文化、2013年より

おふろの絵本で好感度が高いのは、tupera tupera の『パンダ銭湯』（絵本館、2013年　図4）である。パンダ銭湯とは、

パンダ以外入店禁止で、店員から客までパンダしかいない特殊な空間である。そこにパンダの親子が出かけ、入浴するという話だが、驚くべきことにパンダの体の黒い部分はワックスで着色され、目の周囲はサングラスであった。それゆえ、彼らは風呂に入るとシロクマのような姿となる。そして、湯からあがって店の外に出る前にまたワックスとサングラスでパンダに変身するという奇想天外な物語である。銭湯という日本的な場と異国的な動物の組み合わせが、毎年好感を持ってむかえられている。

図４　『貓熊澡堂』
小魯文化、2014年より

入浴絵本が好感を持たれた事例を挙げたが、『パンダ銭湯』も『わにわにのおふろ』も動物が風呂に入る作品だったことに注意しておきたい。過去に授業で五味太郎の絵本『そら　はだかんぼ！』（偕成社　1987年　図5）を扱ったことがある。同作は多くの言語に翻訳されている人気作で、最初は動物と思われた主人公が次々と脱衣して人間の男の子になり、最後は裸になって入浴するという物語である。意外性のあるストーリーは『パンダ銭湯』とも共通しているが、子どもの裸体が描かれていることに対する批判がなされたことがあった。動物の入浴場面は見ていても平気だが、人間の入浴場面は生々しさが感じられるのであろう。

図５　『そら はだかんぼ！』
偕成社、1987年より

この問題には歴史的な背景――日本人は裸体を平気でさらす傾向があった――も関係しているのではなかろうか。江戸時代に日本にやってきた西洋人たちは、日本人が人前で裸体をさらして行水や入浴をしたりすることに驚いて数々の記録を残した。東アジアの儒教国（孔子以来、

肌を見せることは卑しいと考える）の人たちから見ても、日本人の裸体に対する意識は奇異であった[7]。現代の日本では人前で裸体をさらして行水や入浴をすることはないが、温泉や銭湯などで見知らぬ人と一緒に水着を着用せずに湯につかる。

筆者は同僚の福澤レベッカ教授（アメリカ出身の文化人類学者）に「日本で読まれている子どもむけの絵本の中で、文化の違いを感じさせるものはないか」と質問したところ、「おふろ絵本」との答えを得た。日本では赤ん坊の頃から子どもが大人と一緒に入浴し、それを日常生活上の楽しみとしているが、アメリカではそうした感覚が乏しく、おふろ絵本もodd（奇妙）と受け取られるのではないかとのことであった。

吉田集而『風呂とエクスタシー』（平凡社、1995年）は、文化人類学の立場から世界の風呂（沐浴）の分布・分類を行い、風呂の起源に迫ろうとした書である。吉田の考察によると、世界中で用いられているバスタブは水浴であり、日本の「日本型熱湯浴」とは異質である。吉田はオランダでイギリス人の家に間借りした時、風呂の使い方で大きな違いがあるとわかり驚いたという。ヨーロッパでは、

> 基本的に風呂には入りたくないようであった。どうも裸になるのが嫌なようであった。汚れたり、匂いがしたりするとやむを得ず風呂に入る。しかも、それは実にぬるい湯であった。だから、私が入ったときのようには湯気はたたず、湿気でカビが生えるようなこともない。ただし、シャワーは比較的よく浴びる。夜にパーティーなどがあると、ひげを剃りシャワーを浴び、オーデコロンをふりかけて出かけて行く。朝にシャワーを浴びるのも同じような理由である。これはいざ「出陣型」といえばよいであろう。一方、私たちは、外の汚れ・穢れや疲れを落とすために、家に帰るとすぐに風呂に入る。内こそは清潔さを保たねばならないところであり、疲れを癒やしてくれる場所というわけである。これを「清め型」といおう[8]。

と述べている。

ルース・ベネディクトの『菊と刀』では、「日本人の最も好むささやかな肉体的快楽の一つは温浴である」とされ、「世界の他の国ぐにの入浴の習慣には類例を見いだすことの困難な、一種の受動的な耽溺の芸術としての価値を置いている」と書かれていた[9]。お風呂絵本が数多存在する日本において、その読者たちは絵

本の絵を眺めて言葉を追うだけではなく、絵本の表現から風呂の心地よさを疑似現実的に楽しみ、疲れを癒やしているのであろう。家のバスルーム、銭湯、温泉旅行を描いた作品（図6）など、日本の絵本の多くが入浴風景を描いているのは、日本の風呂文化の一つのあらわれであろう。

図6　広瀬克也『妖怪バス旅行』絵本館、2016年より

こうした絵本を教材とする時には、使用言語の問題もさることながら、日本の生活習慣を日本の内側と外側から眺め考察するとともに、コミュニケーションをはかる機会にできればと思う。筆者の手元に、2016年10月からNHKでテレビ放送した番組『旅するドイツ語』のテキストがある。連載記事「おもてなしのドイツ語」では、ドイツ語圏から日本にやってきた観光客に、温泉や銭湯でおもてなしをするための表現が示されている。

> ドイツ語圏では火山活動がほとんど見られないので、日本のような温泉はありませんが、療養（Kur）を目的とした温水プールのある一連の施設があり、ドイツ南部のBaden-Baden などがこうした保養地として有名です。ただ、プールなので水着を着用して入浴します。日本の温泉は高温、かつ水着なしで入浴するということで、初めての人にはハードルが高いと言えます。でもいったん慣れてしまうと、その心地よさに魅了され、ファンになってしまう人も少なくありません。さあ、温泉の入り口でモジモジしているお客さんがいますよ。Guten Tag!　Haben Sie Probleme? Ich möchte Ihnen gerne helfen.（こんにちは！何かお困りですか？お手伝いしたいのですが）と声をかけてみましょう(10)。

日本の温泉や銭湯に慣れていないのはドイツ語圏からの旅行者には限らない。授業中に「こんにちは！何かお困りですか？お手伝いしたいのですが」等の表現の各国語訳を日本人が外国人留学生から学ぶことは可能だ。また、外国人留学生に対しては絵本の絵を示しながら日本人が風呂場での作法を説明するなど、お互いのコミュニケーションをはかることもできよう。

Ⅳ

「日本の絵本を非日本語で読む」と題する授業は、2010年に国立国会図書館国際子ども図書館で開催された『日本発☆子どもの本、海を渡る』展にヒントを得た。日本の児童書が海外で翻訳・出版されている事情をふまえて、授業に活用したいと考えたのがきっかけである。当初「日本人によって日本語で書かれた絵入りの作品」が、日本語以外の外国語に翻訳されたものをさがし、日本語版と外国語版を比較するということを大前提としていればよかった。しかし、近年、そうした範疇では処理できない事例が出てきた。「作者は日本人であるが日本語以外の外国語で書かれており、未だ日本語版が存在しない作品」を目にするようになったのだ。

外国で仕事をする日本人が評価される例は数多いが、児童書の作家たちの中にも日本を離れて海外で活躍している人々がいる。東京生まれのきたむらさとしは、1979年にロンドンに移り、1982年の*Angry Arthur*でマザーグース賞を受賞し、英国と日本両国で絵本を作っている。D・マッキーの『ぞうのエルマー』シリーズの翻訳者としても知られる。また、しまだゆかは絵本『バムとケロ』シリーズで人気を集めているが、カナダ在住であり、代表作『バムとケロ』は日本語版があるのはもちろんのこと、最近英語版とフランス語版が出された。海外在住の村上春樹の作品がおそらく「日本文学」の範疇に入るのと同様の理由で、きたむらさとしとしまだゆかの場合も、作り手が日本国の外に暮らしていても、作品を「日本の絵本」としても許されるであろう。

今回考えさせられたのは、刀根里衣のケースである。授業の参加者の一人が旅行に出かけ、「クラスの教材として使ってほしい」と言って中国語の絵本『美麗的家園』（文図刀根里衣　翻訳　徐素霞　2015年）をプレゼントしてくれた。若い学生に好まれそうな作品であったので、早速日本語版を入手して授業に使おうと考えたが、日本語版は当時存在しておらず（2017年3月に（『ペンギンかぞくのおひっこし』の題で小学館から日本語版が刊行された）ので、教材としての使用をあきらめた。福井県生まれの刀根里衣は、若手絵本作家の登竜門といわれるボローニャ国際絵本原画展で注目され、イタリアに渡った。刀根の作品はヨーロッパやアジアでも出版されているが、著者インタビューによると「物語は日本語で考えますが、出版社に見せるときは英語、もしくはイタリア語で文をつけます。

ネイティブではないので、表現は直してもらいます。言語がわからない国の翻訳版はノーチェック。一方、日本語版の場合、訳者さんは立てません。編集担当者さんと時間をかけてつめていきますが、日本語はわかるだけあって、言葉選びは悩みますね」と述べている[11]。

海外在住の日本人の作品で、外国語版が先に作られ、遅れて日本語版が出されるという事例は、これまでも八島太郎の『からすたろう』などがある。今後は、海外に渡った日本出身の作り手が、日本国内よりも外国で先に評価される事例が増えていくのではなかろうか。その場合、日本語版ありきではなく、外国語版が先にあって日本語版が遅れたり、場合によっては日本語版が作られないままということも考えられる。グローバリズムの時代においては、日本出身の絵本作家が海外で活躍する機会はいよいよ増えるだろう。これからの授業の進め方として、まだ日本語訳のない作品をあえてとりあげ、全員で協力して一から翻訳を試みるのもよいと思う。外国語版をその言葉を母語とする参加者が日本語の下訳を作り、日本語を母語とする参加者がわかりやすい訳文を考えるというやり方もある。日本語オリジナル版の文章はいってみれば「正解」であるが、それが存在しない場合、参加者が訳文を作るのは正解のない問題に取り組む行為だ。上手な訳文を作れなかったとしても、学生にとっては有意義な経験になる可能性がある。今後も参加者の言語能力を最大限に生かし、互いに協力体制をとれる授業の方法を模索していきたいと思う。

(1) 「日本の絵本を非日本語で読む」『小金井論集8号』2011年より、毎号同誌上で連載

(2) 「映画「おまえうまそうだな」を語る　宮西達也さんスペシャルインタビュー」http://mi-te.kumon.ne.jp/congents/article/9-312

(3) 武田雅哉『中国のマンガ＜連環画＞の世界』平凡社、2017年

(4) 「人民網　日本語版　日本の人気絵本作家・宮西達也氏、北京で講座を開催」http://j.peolple.com/94473/8390676.html

(5) 宮西達也『おとうさんはウルトラマン』学研、1996年　をはじめとする絵本をはじめ、宮西の育児コラムなどを含む『おとうさんはウルトラマン／おとうさんの育自書』やカルタなど、様々な作品がある。

(6) 中根研一「中国ウルトラ漫画の世界」『連環画研究』2号、北海道大学連環画研究会2013年、中根「中国ウルトラ漫画の世界2」『連環画研究』6号、2017年

(7) 中野明『裸はいつから恥ずかしくなったか』新潮社、2010年、85～105ページ
(8) 吉田集而『風呂とエクスタシー』平凡社、1995年、222ページ
(9) R・ベネディクト『菊と刀』長谷川松治訳　現代教養文庫、1967年、205ページ
(10) 谷澤優子「おもてなしのドイツ語　最終回　温泉・銭湯でおもてなし」『NHKテキスト　テレビ　旅するドイツ語』2017年3月
(11) 刀根里衣作『なんにもできなかったとり』新刊記念インタビュー
http://www.ehonnavi.net/specialcontents/contents.asp?id=172&pg=3